

杜甫・杜預墓探訪記

松 原 朗

杜甫には、著名な詩人の例にもれず、多くの墓がある。⁽¹⁾その主なものに限ってみても、湖南省の耒陽と平江、河南省の鞏と偃師の四つがあるが、このうち杜甫の眞正の墓と考えられるのが、偃師の杜甫墓である。

杜甫は、代宗の大曆五年（七七〇）冬、洞庭湖に注ぐ湘江の上で、長い漂泊の末に没している。しかし、當時ただちに偃師に歸葬するを得ず、いったんは岳陽に殯葬された。その後四十三年、憲宗の元和八年（八二三）、孫の杜嗣業の代に至って、杜甫の柩はようやく偃師の遠祖杜預（二二二—二八四）の墓の側に改葬されたのである。⁽³⁾

偃師は、現在の河南省洛陽市偃師縣。縣城は、伊洛の二水が合流していわゆる伊洛河となるあたり、すなわち洛陽を眞東に約三十キロ去ったところにある。偃師行の當日、六月十

三日の洛陽は、夜來の雨があがった後の薄曇りの天氣だった。華北には、梅雨がない。だから六月の炎天下は、灼ける様に暑い。こうした薄曇りの天氣は、むしろ遠出には好都合である。しかも望外の幸いとすべきは、當地の歴史と地理に詳しい王元明氏（『唐詩名篇新論』香港天馬圖書、一九九二年の著者。洛陽高等工業專科學校中文系教授）の同行を得られたことである。いわゆる觀光コースからはずれたこの方面で、果して目差す杜甫と杜預の古墓に辿りつけるものか、甚だ覺束ないことだったからである。

租車は、洛陽の目抜き通り中州路を東に抜けて、鄭州に向かう隴海鐵路を右に左に見ながら、白馬寺、漢魏洛陽故城を通って、偃師縣境に入る。ここからは縣城まで、あと十五キロばかりの道程である。洛陽と鄭州とを結ぶ長距離バスや、

作物を満載するトラクターをかわしながら、簡易舗装の悪路を走る。

杜甫墓は、その偃師縣城の西はずれ、杜樓村の北の一角、今はすでに刈り取りの終った麥畑の最中にあった。周囲には、その所在を示す案内板らしきものすらない。道を通りかかった近在の農夫に尋ねながら、探し當てるしかなかった。

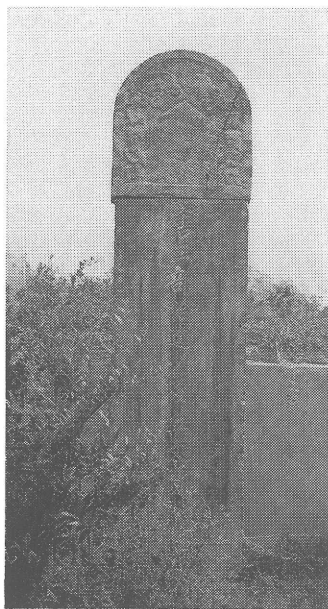
墓塚は、直径十メートルばかりの八角形。高さは、大人の身長を少し超える程度。まわりには、腰高に青磚の堰堤をめぐらしてある。墓塚の南端には、高さ三メートル弱の墓碑が立っており、「唐工部拾遺少陵杜文貞公之墓」と讀める(図版一、二)。墓の周囲はきれいに耕されているのだが、墓碑のまわりの鍬の入らないあたりには、雜草が生い茂っている。簡素な、と言うよりも捨ておかれた様に麥畑の中にある杜甫墓のたたずまいは、却って杜甫の文學が闊してきた歲月の久しさを無言の中に語るかのように見えてきて、むしろ印象ぶかい。同じく洛陽にあって、伊川を隔てて龍門石窟と相對する白居易墓(白園)が、整備されて觀光コースに組み込まれているのと、いかにも對照的であった。

杜甫は、十三世の遠祖杜預を敬愛して、生前はその側に陸渾莊を構え、死後はその地をみずからの墓所と定めた。だか

杜甫・杜預墓探訪記(松原)



図版1 杜甫墓 北東方向を望む



図版2 杜甫墓正面

ら、杜預墓はこの間近かにある。しかし杜預墓を見付けるのは、いっそう容易なことではなかった。杜甫墓の北、約二百メートルを、東西に隴海鐵路が通っている。杜預墓は、地圖に據れば、鐵路の北側にあるのだが、そのあたりを右往左往して捜しても、杜預の墓らしいものは見當たらな。道の右手(東)に、圍牆を厳しくめぐらした果樹園がある。最早ここ以外にはあるまいと思って、果樹園の門扉をしきりに叩くと、やがてランニング姿に汗を滴らせた、顔の色つやを見ればまだ三十代の半ばとおぼしき主人が現れた。杜預墓は、やはり、この果樹園の中にあつたのである。

果樹園は、相當に廣い。優に一ヘクタールはある。主人に

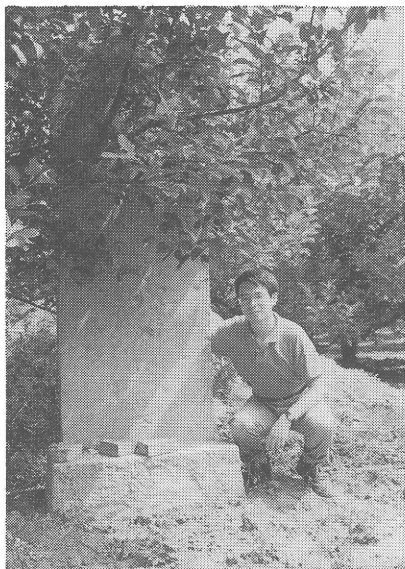
ついて、東に三十メートルばかりの桃樹の徑をぬけ、そこから南に折れて、今度は苹果の樹の枝をくぐって十數メートルばかりゆくと、緑の葉蔭に、杜預の墓はあつた。墓塚は、平らにならされてしまったものか、殆ど認めることはできない。墓碑の背後に數十センチほど盛りあがつた土塊が、あるいはそれかと思わせるばかりである。そして墓碑は、どの角度からながめてみても、太い苹果の樹の枝と、重たく茂った葉に遮られて、正體を現そうとしない。枝葉を押しやりながら、ようやく「晉當陽侯杜公諱預之墓」の磨滅しかけた文字を辿ることができた。牛がその角を研いだために碑文が磨滅したとはよく聞く譬喩であるが、恐らくは杜預の墓碑の文字は、遠からず、苹果の枝にこすられて湮滅することであろう。(図版三)

ふと右手奥をみると、腐草の間に半ば埋もれて、大きな石塊がころがっている。腐草を去り、泥土を拭い落としてみると、それは崩れ落ちた螭首(墓碑頭部)に相違なかった。(図版四)

果樹園の主人は、名を劉供恩という。主人が言うには、以前は鐵路の南邊に住んでいたが、敷地が鐵路工事にかかったので、現在の替地を與えられた。そこにたまたま、この墓が

あったとのことである。主人は、杜預墓の存在は知っていたが、杜預の如何なる人かを知らないふうであった。杜預墓の側に立っていると、時折、隴海鐵路を列車が轟音とともに通り過ぎる。鐵路は高架になっているので、果樹園の圍牆越しに車輪の裏までよく見える。二十メートルとは離れていないだろう。とすれば、杜預を慕ってこの僱師の地にみずからの塋域を營むように遺託した杜甫の墓は、鐵路をはさんで、確かにこの眞南ほぼ二百メートルにある筈だ。そんなことを思いめぐらしながら、にこやかに笑う果樹園の主人に別れを告

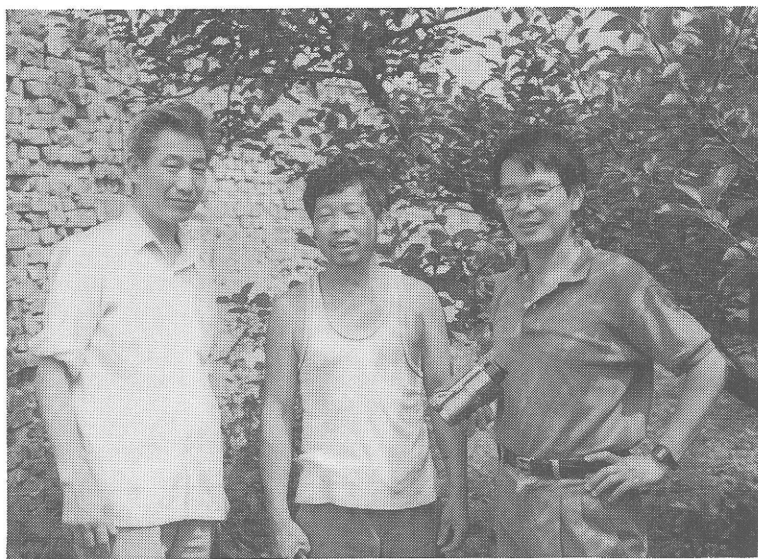
杜甫・杜預墓探訪記（松原）



図版3 杜 預 墓



図版4 墓碑の崩落した嶠首



図版5 左より王元明教授，劉供恩氏，筆者

げた。(図版五)

〈注〉

(1) 傅永魁『杜甫故居與杜墓』(河南人民出版社，一九八六)

に據ると、杜甫の墳墓は全國に八箇所、すなわち湖北の襄陽・湖南の耒陽と平江縣小田村・陝西の鄜州と華州・河南の偃師と鞏縣・四川の成都のものがある。

(2) このうち耒陽は、杜甫終焉の地と伝えられるもの、平江は(注一)前掲書に據ると、杜甫が殯葬された岳陽の土地、鞏縣は杜甫生誕地として、それぞれに杜甫とのつながりがある。

(3) 元稹「唐檢校工部員外郎杜君墓係銘并序」に「(杜甫) 嗣子曰宗武、病不克葬、歿。命其子嗣業。嗣業以家貧、無以給喪、收拾乞匄、焦勞晝夜、去子美歿餘四十年、然後卒先人之志。亦足爲難矣。銘曰：維元和之癸巳(八一三)、粵某月某日之佳辰、合窆我杜子美於首陽之山前(偃師縣)。嗚呼。千載而下、曰、此文先生之古墳」。

(4) 徐金星・黃明蘭『洛陽市文物志』(徵求意見稿)(洛陽市文化局、一九八五年)に據ると、「墓前有石碑一通、爲清乾隆年間所立、正面正中刻有『唐工部拾遺少陵杜文貞公之墓』字樣。一九五六年河南省撥專款修、用青磚護其墓、呈八角形。一九六三年經河南省人民委員會正式公布爲河南省第一批重點文物保護單位」とある。

(5) 杜甫「祭遠祖當陽君文」に、「維開元二十九年歲次辛巳月日、十三葉孫甫、謹以寒食之奠、敢昭告于先祖晉駙馬都尉鎮南大將軍當陽成侯之靈。……小子築室首陽之下、不敢忘本、不敢違仁。……」とある。

(6) 國家文物局主編『中國文物地圖集』（河南分冊）（中國地圖出版社、一九九一年）

(7) （注六）前掲書によると、杜預墓は偃師縣文物保護單位となつてゐる。また同書に據ると「墓塚高一・二〇米、面積約十四平方米、前存清乾隆十一年（一七四六年）立墓碑一通、碑高三・二八米、寬〇・七三米、厚〇・一五米、中書『晉當陽侯杜公諱預之墓』と記される。しかし墓塚の規模は、現實にはこれよりも小さく、また墓碑の高さは、螭首が崩落したためであろうか、この記載よりもはるかに矮い。

〈論稿募集のお知らせ〉

『中國詩文論叢』第十四集の論稿を以下の要領で募集致します。

應募資格：本會會員の方に限ります。

應募締切：一九九五年七月三十一日必着。

提出先：東京都新宿區戸山1の24の1

早大文學部松浦研究室宛